慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	現代哲學への途, 川合貞一著
Sub Title	
Author	松本, 芳夫(Matsumoto, Yoshio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1922
Jtitle	史学 Vol.2, No.1 (1922. 11) ,p.133- 134
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19221100-0133

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

のことを識したものであらうと云ふてゐる。蓋にその通であらう。昨今小作問題の喧しい際でもあるし小野氏のこのモノグラフは史學上の有益な研究である。但し結論に社會制度の改革は困難で、私有財産制が社會主義制にするのは固より、社會主義制を私有財産制に復するのも困難であると云ふてあるが、閑與の改革は地主の私有財産の大部分を小作人の私有財産にしたので社會主義制の社會を造つたのでは無いと思ふ。自分は社會主義制の社會は人性の趣く儘に忽ちに私有財産制の社會に復歸するものであると考へる。

（田中萃一郎）

現代哲學への途（川合貞一著　東光閣書店發行）

われらの多年切望してやまなかつた川合教授の『現代哲學への道』が、いよ〳〵新秋の讀書季に際して公刊されたことは、わが學界及び思想界の喜びでなければならぬ。書中收むるところ十五篇、『主として哲學に關してこれまで世に公にした論文や講演を集めたものである』が、本書によつて更に新に教へらるるとともに該博なる知識と精到なる論理と深遠なる思想とは、わが學界において獨自の地位を占むるものであることを思はしめらる。殊にわれらの興味を喚起するものは、『歴史哲學の問題』と『歴史に對する近代の認識論的考察』との二篇である。けだし歴史が學問として成立し得るや否や、學問なりとして如何なる性質のものなるかといふ所謂歴史哲學の問題は、最近の哲學界における最も重要なる論爭であり、而してこの問題の解決が、われら歴史の學徒にとつて極めて重大であるからである。假令この問題の解決が哲學者の任務であるとしても、歴史家はこの問題に全く無關心であつてはならぬ。自己の攻究する學問の性質意義を知らずして、われらは十分の努力を有意義につくすことができないのである。

而してこの歴史哲學に關して獨特の見解を下し、歴史が自然科學に對立する經驗科學なることを主張して、學界に多くの問題を提起したのは、ヴインデルバンド及びリツカート等の西南獨逸學派であるが、しかし從來のわが學界においては、多くは彼等の學説の單なる祖述紹介にすぎなかつたが、われ等は如上の二篇によつて彼等の學説に對する眞の徹底的批評に接することを得て會心の至りにたえない。『歴史に對する近代の認識論的考察』は本誌第一卷第二號に掲載されたもので、讀者の記憶に猶新たなるものであるが、『歴史哲學の問題』は、一、歴史の見解、方法に關するもの、二、史實の性質に關するもの、三、史的法則に關するもの、四、史的生活の所依に關するもの、五、史的生活の意義に關するもの等の諸問題を簡明に論評して、われ等に教ふるところ極めて多い。

ヴインデルバンド及びリツカートは普遍性と特殊性とを相對立させて矛盾概念となし、自然科學は普遍性を、歴史學は特殊性をもとめるものとなすのであるが、これに對して著者は歴史は『特殊性といふ點から現實を見たものではなくして、個々の系統に於ける文化生活の內的關聯を覓めるものに他ならぬ』となし、そして特殊の事實の內的關聯を明かにする以上、ある種の普遍を覓めてゐるものであつて、歴史の價値は文化生活の內的關聯が明かに

なつてゐるか如何によつて定まるべきものであると言つてゐる。つぎに一般歴史家は、『歴史はあつた通りに物語るべきもの』と解するけれども、史實は理解されたる現實であつて、文書製作者若くは他の何人かの主觀を通じたる事實であり、且つ史實は何れも斷片的性質のものであるから、それらを材料として史的生活を再建するには歴史家の主觀によつて附加へる所がなければならぬ。即ち歴史は一種の創造であつて、藝術的性質を帶びてをり、從つて到處に直觀の作用が働くので、單に考證をもつて歴史の能事終れりとする如きは非常な誤であることを警告される。しかし歴史が純然たる藝術でなく、學問として成立するのは、歴史が現實の認識であるからである。即ち史的生活の事實の目的關聯を定めてゆく所に學問としての價値が存するのである。而してこの史的生活は二方面から見ることができ、こゝに學問の二種類の區別が生ずるので、一つは同一の現實を外的形式の方面から見て法則を定めるのが主なる場合と、一つは其の内的意志關聯を定めるのが主となる場合とであつて、前者は社會科學であり、後者は嚴密な意味で言ふ所の歴史であるといふ。

更に史的生活の所依の條件、史的生活の動力が何であらうかといふ疑問に對して、從來與へられたる二通りの極端なる解答、即ち理想主義の見解と自然主義の見解、及び後者の一種類たる經濟史觀、並びに史的生活の支持者についての二見解、即ち個人的見解と團體的見解とを檢討し、最後に全體としての史的生活の意味如何の問題に對して、この問題は『どうしても特殊科學の答へ得る所のものではなくして、全く形而上學の問題であると云はなければならぬ。蓋し意味の問題は價値の問題であつて、價値の問題は經驗的科學の問題ではなくして、超經驗的形而上學の問題であるからである。』『が意味の見地を以つて史的形而上學に於て、始めて現れるものであると解してはならぬ。何故かと云へば意味の見地は具象的な史的研究の中に既に内在してゐるからである。……で史的形而上學に於ては、歴史其の物の中に既に存してゐる所のものを取つて、之を開展せしめたのに過ぎないと云つても敢て過言ではない』とのべてゐる。

以上は『歴史哲學の問題』の内容についての極めて簡單不完全なる紹介にすぎないが、われらはこの一篇の如く、歴史哲學の問題の殆んど全般に亘つて論述批判し、その見解の卓拔なるもの、わが學界に公にされたるを知らない。著者の哲學に對する見解乃至その態度は、『哲學の運命』『科學と哲學』、殊に『直觀哲學の弱點』や『流行哲學』等の諸篇によつて知るを得、その人生觀は『戰爭哲學』『共同責務の思想』『恩の思想』、『再び恩の思想に就て』等の諸篇によつてうかがはれる。が就中恩の思想において多くの尊き教訓を學ぶのである。猶歴史の學徒に對しては、『宗教の進化』もまた多くの示唆を與へらるるものであるが、其他『ルドルフ、オイケンの新人生觀』『歐州戰爭と思想』、『潜在意識に就て』、『スペンサーの哲學』等いづれも金玉の文字ならざるはなく、わが學界及び思想界は本書によつて啓發さるゝところ頗る多く、その客觀的價値を充分に認識せればならぬことを思ふ。（松本芳夫）